

私の学生時代

新名 勝（教育・昭和57年卒）

38年間の教員生活を終え、3月に退職を迎えた。この時、今回の原稿の依頼を受けたのも何かの縁かもしれないと思う。新規採用時代は、大学生活を振り返ることもあったが、それ以外はその余裕もなく日々を過ごしてきた。

昭和53年に香川大学教育学部に入学した。今はないが特理課程の化学研究室に所属した。決して自宅から通学できないということはなかったが、入学当初より下宿生活をするようになった。入学当初は、初めての大学生活に新鮮な気持ちと緊張感をもって過ごし、前期の試験まではかなり勉強にも力を入れたつもりであった。しかし、半年も過ぎたころから学業以外の様々なことに興味関心が向き社会勉強(?)に力が入った。同時に本来の学業から次第に気持ちが離れ、単位の修得もままならないまま、四年生になった。進級当時、専門だけでなく一般も含め、卒業に必要な単位をかなり積み残していた。さすがに、それらの単位を何とかすべく、少しは本来の学業への意欲を取り戻そうと努めた。

そんな中、卒論に費やした時間の思い出は、色濃いものであった。西原浩先生のゼミにつき、研究テーマは「ビール酵母菌の凝集」。ビールにはすでに社会勉強で親しみ深い存在であった私には、最も適していたと今さらながら思っている。若い西原先生は、親しみやすく、出来の悪い学生であった私にも、熱心に指導して下さったと感謝している。ただ、実験自体はかなりハードなもので、三年間真面目に実験に取り組んでいなかった私にとって、厳しいものだった。菌の培養から測定値の集約までの二週間が一サイクルで、この間は休日もなく、時には夜遅くまで3人のゼミ生で実験を続けた。

理論的なことは正直なところ理解はできなかったが、実験とは何が大切かについて身をもって学ぶことができた。定量的にも定性的にも細かさが要求される実験だったが、雑な性格な私には根本的に不向きなことが多々あった。実験器具の洗浄についても徹底的に指導された。試験管1本をここまで徹底的に洗浄する意味も分からずしていたが、ある時リンの測定をしていると異常な数値が出た。原因は、明らかに洗剤を十分に洗い落とせていなかったことである。また、二日酔いで入れる薬品を誤り、全て実験を台無しにしてしまったこともあった。

卒論と向き合った時間だけは、大学生らしい生活を過ごせたと思う。この年齢になりもう一度大学で「学び直し」をしてみたいという思いがよぎることもある。あのころの大失態も含めて、人生の貴重な経験が凝縮されたいい時間だったと、改めて懐かしくいろいろなことが思い出される。